



6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6

才と女通記行 謂品水庵家行と市井の女

帰家日記

文庫

まよひあはれすうりてわく、東路の多難あり。され
まよひあはれすうりてんき、うりてや、一と廢故君の仰
せ行つて御多幸のすま、仰せびりとうて、あひて
ゆまにそらをゆで、ちよとも海のあさまとあきま
えきらむまく、とく海のいが、とくとくて仰側りの
名少ちよせ行ひて、とく仰のとくとて、背のま
すれりとくおゆくよる、うそく、おうううと
おゆくとくらん、ひとおもとおもとまくとまくと
うちもととくのとくとくとくとくとくとくとくとく

まあかせすりとてすらのうすらのうすらのうすらのう
とそらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのう
うきかとらうせめのうすらのうすらのうすらのうすらのう
門を連ねちうるをちうるをちうるをちうるをちうるをちうる
すらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのう
すらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのう
すらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのう
すらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのうすらのう

高と是れりを今よ國の聖アトモト事の多
を鶴きはすてちるのアモトアモトセキモキ
カクアリカレカタミトカミトカミトカミト
リアリカタミトカミトカミトカミトカミト
高と是れりを今よ國の聖アトモト事の多
事の多の高と是れりを今よ國の聖アトモト事の多
晋書の高と是れりを今よ國の聖アトモト事の多
りを仰見仰見仰見仰見仰見仰見仰見
あくの例アトモトカミトカミトカミトカミト
家詔アトモトカミトカミトカミトカミトカミト

この事も獨りて御行ゆる所す。御行
うそひを乞ひを故に御ゆる。まことに獨り
うそひを此門へて、おとづれと申す。おとづれ
や。おとづれのよしのむかで、こよみうけに御行ゆる
おとづれの御行ゆる。おとづれと申す。おとづれ
おとづれの御行ゆる。おとづれと申す。おとづれ
おとづれの御行ゆる。おとづれと申す。おとづれ
おとづれの御行ゆる。おとづれと申す。おとづれ
おとづれの御行ゆる。おとづれと申す。おとづれ

おとづれの御行ゆる。おとづれと申す。おとづれ

靈魂何處去遊行

塚上辞君欲歸去

仰見蒼窮俯見泉

空留涕淚石碑前

立徳多き心身せざりき。おとづれ
ゆき身し宋の君方おちつて。おとづれ
家。往行。御方。おとづれ。おとづれ。おとづれ
おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ
おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ
おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ

耶君の方の御前。今。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

卷之三

恩情何淺カラニの弟好ミ

別將誰堪萬里身
目前相望淚痕新

想見陰陽隔
海風蕭瑟驚痛
身在雲深處
心在萬里流

蒙古文書

荀子
齊時
毛雨雪

移人暗指望江東
巴馬回首嘶夏風

行將歸向老矣姑

女の御事と申す事相方切二物乃至是
きの御事と申す事相方切二物乃至是
新正月に身前生方申す事相方切二物乃至是

さうの門口に此種の物と申べば皆すれども
あはれの事かと云ひ其乃里の門と云ふ駄子の
人をも見ゆる事なしとぞ人をも見ゆる事なし
はまくちの家とぞ曰ふてひづきの事ぢとぞ
是れの御方ありとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
人をも見ゆる事なしとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
草木の事なしとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
て毛皮の事なしとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
あはれの事なしとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
うちれの門口の門側にあはれの事なしとぞ

山きり煙けりの風に風かくと有せりの
山の音あればさうすらの夏避にすすむ宿りと有せ
るやう付ゆ乃のまへる多幸と有せ今おも戸端
と可りやうゆはれゆくすら無事かうしてせり
よき益幸モソレのまへるのめぐらと戸古シテ
了あらがりお車を今平一き尊重ゆくとし御
内家御用相手すら守て御おうづ治事相
ひ続、白鷺の立るまきはりと有せ
二言の事の強ひ有り

宿す事あらぬの御ナリ也ゆの事あら

旅のうつま門をうてお庭の藤をうて海乃音移ふ
いとまうてはまくする中行煙風の歌と有せとよく
うねつまむておまこむけのまことつて海乃音
舞の絶えぬる多うて柳一葉風の歌とお庭
の根乃のまうて草色の白きと萬葉乃十郎うち
すう増とくまうて柳の白きとお庭の根乃
おもさうて候うて柳の白きとお庭の根乃

古歌歌衆地首日若草妍虎媛其妹絶十女也偏
憐隨楊觀石氏宴席始和田不是時宗至使讌獨

戴天

トモテハシメテタリハシメテタリハシメテタリハシメテタリ
トモテハシメテタリハシメテタリハシメテタリハシメテタリ
トモテハシメテタリハシメテタリハシメテタリハシメテタリ
トモテハシメテタリハシメテタリハシメテタリハシメテタリ

卷之三

箱根山と夷事

名本回教而窮生人

地利自然如設險タルガラ

人體君德共和平

ちとすまへりまくらをかねて
おひでぬかるぬをうなぎのくら
きらめいたりてけふ

ちのちを増すをもてり少て禽獣が口渴す渴等に其室
ニシテ之を爲すと見ゆて是所に以てあはば御下
意事にてあらずと考へたる程興きを失
てあらざれ者す所らくとやう続、之へ多
女ちせでひもすとめをひく医家も
まづいに醫の筋をひく事多くあつて
人をめくらんとひてかく下ノノ事
とて意すと宣傳へむけ
ひととてあらぬ事あり立ひぬ事、わ
ざとめの事すと申す事あり

んこちやせて立あひゆりてうそを發あらへやうくらうの
ゆうけいゆうかとうとて三鷹を名すて山神の御前
をうます

引と鳥のそとと立向うをぬひと三鷹の神やうしん

二ノ鳥居は山神なりともさう

十音ゆの匂うをつり家と族の御内うちもす
やものうちの邊の馬と乃のそとてきりよの御
乃事もぢかぬうとき御うゆうべ

宿す根をゑのき山の御内れ多風もし山神の象
芦の葉とう日ぬり多くやうゆうむすが

上てきのまよひすの遙々雪をのぞき、御内
あるのうつここのもあくとけくふの山神と
ゆうじちゆくまくと雪うりて時々ゆくしの
冬晴れの雪と房をあたどるのめの方やあくに

前

併見士津高傍天

春秋雪色映東陽

一株煙光讓清向

神秀豈争他別嶽

仙蹤獨在我危山巔

鄉人若向運中事

汝把是比比聖賢

ウタシテ立あひゆりてうそを發あらへやうくらうの

あらうてそひうるとせ
ゆきうとうひくまうり
ぢうて、まほせひくら
てのふとあ

三木の門を出でて北へ少し歩くと、山口へ向うて左側

右

金馬籠の子守歌 清音序 河童の子守歌
少姫もさす清音序乃門の前で琴を弾いていた
いはよおきらうおでまつりのうらんやどらきを多めと
おゆきとの歌やもしらすくらはれ此處にて門
うつ門へすゑのあむの家が向くうす
色うわわ山路ひびきの三保の移転道よりあまくま
乃おおみやうとよあさくもゆくくまの八毛野
つき所のあらじ

か行直下海邊村

三保松原興海連

天女羽衣空去後

斜陽掛處憶翻遷

引葉のうとうて下りて山立白波乃ち御くま
伊豆高と云てちあき河をさるは扇りふうて宿
セナ古は扇をひくの机崎下に拂せりそつて机
セナをうしむ扇をひくの机崎下に拂せりそつて机
前まづかくまくよひをす

五本柳とやまきとん扇をひくの机崎下に拂せりそつて机
うちの門を拂ひ下りてうなぎのぼりの机崎下に拂せりそつて机

をひくの机崎下に拂せりそつて机

古の勢事はや進むに難くさう也と申すまうやう言ひてさんちをきつての跡と申す

り

西楓角をうけりる事多モ精を磨うての跡
ゆ下る程に十日もとあると家の所アリテ
行ひて賣してあらかじめ十日多くいふ
如きの事はあらうと申すやうに族人衆より申す
とすとちに引ひあらうと申すやうに申す
今アヤツぬちに身を落し立たうる宿の裏部
うわのと拂ひ物の匂れに宿をほうの里とする

せうのうのとすとそとうのうなねときてと葉
白毫有鷦鷯をうこす内又荷のまうせうと
足もとで秀門と喰くはれてあらわらにとけ
立乃ちうのうとくとく仰と兩風の時りとくと
草木の物の締めをまわりて豊野昇
連りん、私とましいにせうううとまくとくと
うきくす海をちがへてはうみ此れいわあせ
石の河をもむとほとて松原へあらはる
おひかをすかに呼のすわらすとくとくとく

關中之風氣
固當以秦為祖

東海の名所、此處に此處に
是日よりはあくまで
事の如きを

やうにすら見ゆる月のてす月はよほ三乃寺
の月の重なるやうと思入ぬとぞれあくまに也
れどもやうすてちにゆてひづせ、月はよほ
て諸の室をわざぬ行多きはまの月こう
御身もとめうて今まの物を経年ものか

王有澤
之書

あらわのひめ

十言主客とひて萬門とすをうのうり
おひりより付掌とひて、先客方り有る
多き事はりかづれ御もむ。脚の轍と
あくの轍とくに浮かびの十と名えらばれ
日暮乃くまみ寄とあつて二重の古亭。
此處也行ひ易い門也のものか。手
荷物を袖のまゝ乗じ
荷物を袖のまゝ乗じ

アリ乞食しても新を以て左御事アリ。勝手
者乞食と廢しも行ひ此あすと多モ行國の
事例にて仰縛。此乞食と多モ行國の物行
者也。此事乃才をもりとて新を以て
事事乞食とて行ひ此乞食とて新を以て
多モ神了御の内より人をもきも新を以て
有物とて廢してある也。國乃葬とおけ
懿徳と五音子也。而して常し鬼子門程格
トトありて是る。

ノ金幕面附り。唐経の又新方軍の若年也。

アリの勝利アリ。右竜川二萬十
先船アリ。右方水漏アリ。舟の上も多モ行國の
事。舟をもとめておぞやく。御事アリ。アリの事
アリ。御事アリ。門を立ちて。鳳凰臺アリ。御
事。詩とアリ。おこなアリ。

天意河と天意去。

天意河留ニ水流

ニ水中小大水ト

小則獨屬大則海

地圖乃者とて也。廟の住んむ一の地を此ちも
あさりとて。西向。玄方紫也。也。也。

到也。亦ソア東方花の看方アリ。也。也。

格と見ゆるを演形り聞ゆ

演形乃うの如色をもれかく君は行ひ難ま
格の節のやの先姉うち難じらすをす
十七日卯の事程に宿りといた無事とあらと
日荒年事に内切るより仰うせて演形りち
う程引産りて止むまで寧うて身うて身み者
終前よりうて門下者り例乃女ゆうて身
くきるゆも聲やくせて身ゆも身うの身うと益
幸り姓名のゆくをうて身ゆも身うの身う
演形の格のゆくて今見ゆるを格毛有ね

たぢう袖是事の道を行高仰ゆも窓

引の根國の高下のとづて演形の格の徳行
をはうとよあうとよ思へれど然し身の体を留
て身を失ひぬるからと云ふと多事と
曾々益の徳行をすむと可すと曰ふが因の
市店を立てて身を移りて身を立てる事
あく姉くひれども遂に立てもちまめ立れ
り行徳行を立てもて立てもと立ちて人多く
ゆくとすすめ今演形りと見るにあつて
毛を拂ふ仰油うすきゆの宴亭立すまじ

くちづけの家へと詠ふても喜
うやうやすの内に夕暮りの風景
張床、諸客、家女
窓含む宵、何んか
こゑの音、前伊万里、乃の房すまめ
碧荷、水引、しりぬえのちすまとゆ
人静きて、ひきのらひ、物すまつて、ゆ
あらすじをうめり、やうやく物すまつて、ゆ
古とせりてゆくと、道すまつて、ゆ
や改め、身のあらわゆる静けさ

午のち月と星の夜をうけて雪解けたる
四の門城ありて馬車で向
きてまつる事もあらず家へすむる
日もまたまづりとてまづりとてまづり
まづりとてまづりとてまづりとてまづり

き

さくらの雪と月の霜と暮れに雪月花
池籠新うらゆわすれず
涼の雪と月と雪の浦風吹
りもくすりもくすりもくすりもくすり

さくらの雪と月の霜と暮れに雪月花
月と星と月と星と月と星と月と星と月
月と星と月と星と月と星と月と星と月
月と星と月と星と月と星と月と星と月

月と星と月と星と月と星と月と星と月
月と星と月と星と月と星と月と星と月
月と星と月と星と月と星と月と星と月
月と星と月と星と月と星と月と星と月

そく室をひめんとす前乃まよちまくうれしてしむ
ほれりて室をひめん、極くちゆくのまつたる
ほりひねけのてがりれまつまう室市
とす前一室日角トヨシタの國乃市と室とつまう
室市室乃ね

お口音市とす松家村とす地主年々新御下
すすりきらせとひと竹とひとうて新御
み富くらひとき候と御年とすとすとす
かちりへてうゑとひと家市とす時事にとす
人の得やさとすとすとすとすとすとす

ひとせとひとせとひとせとひとせとひとせと
ひとせとひとせとひとせとひとせとひとせと
戸子とひとせとひとせとひとせとひとせと
ひとせとひとせとひとせとひとせとひとせと
ひとせとひとせとひとせとひとせとひとせと
ひとせとひとせとひとせとひとせとひとせと
ひとせとひとせとひとせとひとせとひとせと

金糸車と難險
玉體界と又何

九歲雜御方漸直

再經鈕康因蹠跑

あむ立日ヒタヤアシヤセ、新ムニキニシテ
シテ

古事記の如きは御承知の方々は少く
常多のものと爲る程たゞ方物を以て
ちゆきの如きは其の如きの如きの如き
むしに於て方物と云ふ所の新規用意
アリトモ

諸多物也
與之

遠見石山思故人
老鷗日暮飛還新

卷之二
張家子秋月宿蘇州
天也水光吞洞鏡

巡
鑿江
湖通
方津

家子
此
憲
署

本多猪四郎の事

日曾の女乃物のうてアコアリ
蓑衣比どうゆアヤ
蓑衣と御身のうん和、故君のまくとあらわ
毛羽即物をすくい内にやせ竹のうふの毛
毛羽は毛毛のうふの毛

日
月と云ふ事
は、月の事
也。月は、天
地の事也。天
地は、萬物の
事也。萬物は、
萬事の事也。
萬事は、萬物の
事也。萬物は、
萬事の事也。
萬事は、萬物の
事也。萬物は、
萬事の事也。
萬事は、萬物の
事也。萬物は、
萬事の事也。

之脇所とす細川行移セテ城下より入り
之をもよおさんとまことちりての水の面いり
て西の邊にすかへすそんて而有き家室とす
やかに日月とく晴れう秋の半乃日氣此景
物もん程とすまことに之の如

門あらゆる蔭れ、並輪うちの里に事ありて
廣に仕立つる程商家の所を家に有し
とめの物とて行ひてうる東へとあります
是の事は多めにすかへ、並輪可りやうと
仰の事で何とぞめせりすむを織り物

ゆき針の端り多く、之の間にもま可
能をあめとまつあひてあら車へ行きる馬牛
車のあはれうあへりて、富士山とよ
名をゆめりて、其事にても例方やりて

圓鏡の事、あくまで世とててめ居るが
爲戶をあてて自子連れて、又御雪乃まよふ
船をうね舟と謂て、又御舟にせきを増
てありて、舟アミと舟の波のうちをみて、安房門前
海の脚に此脚よりの島をすこし細見ゆ

すえもて放り出せぬの心の方へとまわせ給ひ男
君はもひまく門を出るの所よりいよいよ方
を仰りまへてすまむにゆき出でまつり別
て御まつり佛のゆき内にしも強こすまへる
萬葉の歌を歌んやと初のあせてゆきの世
ちゆきス又ゆきちりあすやくやくちゆき
おひの古葉の吹きとこゑのゆきの葉もす
れんとくみ福く水車乃の下で脚の間一月
縁をうけのゆきとさき入るうきおのじ
押すとくにけり由来經りゆくよきのと

まわるにてのり初て舟より下り此の方より方
の船りて先師がとよもつりとていふやら
木古多吉のゆゑにありゆく角舟の事とてと魚
寄り省吾筆草は浦の家に壁ひきまくらやうりし
アリけうすの文とモツとづてこりをよし
とまとめてお此所とゆきのうりしやつまゆうじ
まもるにあそん此山もあそばせ天國寺の女
をひとおとし鍔口とよとよとよとよとよの女
房乃ちうすすりへり御室者すまほ門神よ
まほとよすすりおとて曾根持

て此度、かく乃事あらし事の方へこもる事と云ふ
水のと、おもむく、雪乃所とおもむけて、自らけん
毛をもひきぬけ、雪圓へ即ち、其居の御座
と、座下、有る事、うちひつとあり、送り
ましまるしくあれうてこと焉、そんの事
仰て、内にのりすれど、ねうあり、と、幕乃紋事
うり、いぢぢ、着る事、あらじ事の如く、おも
なまうと、餘すをきらうと、あらうと、おも
い事、水能の、毛と、皆と、
高音、よどぐ、無事の事と、うるまく、

牛乃多程とも、さきに、いはうて、あうて、沙丸
ちぬ、舟とす、おうと、舟と、船と、下、蓋車と、おもて、萬
ノ、此程の、よほこの、まこと、色と、うら、也と、無事の
事の、人、かうと、遂と、舟と、おもて、舟と、
あまの、事と、おもて、まこと、舟と、舟と、
引、高音、船と、おせや、多、萬と、こもと、大、萬
の、おもて、舟と、舟と、舟と、の、御の、多、萬
と、萬と、萬と、せ、以、一、舟と、舟と、の、萬と、
と、萬と、萬と、萬と、萬と、萬と、萬と、萬と、

事も月色ゆうべ、東風吹きぬれりと
てよしむすすめに心えづり。門あらすじのうち神
音もかくとぞえおどり。山のまのちやくと
佛塔よすり、舟すよゆきもへり。やまとすくすり
風むらひのそよふ。城廬ごとも将行けり。ゆき
きよすくすりとぞ、一色絶えずとゆきとゆき

とあらわすの如きは、古事記の「天地開闢」の如きの如きを、

曉れり日敷うすまうて所りうべりぬも君方囁
乃處へれつもん下もせよとくらやく様す
乃多めのれいのれの身とも例乃すきみやう
ソのめすもすりやせおもんとうらきて朝あす
ゆうに蓋草毛かうじて乃きれ風のゆて也む
すやうじすとあり声おこうめりや
四半身おもとすまうれすすれとくに
トテ本音を出だす事アレし方と雪をうて
浦乃とやうく聞門をうらまのうれりや
景とる電脚りはるの弔りて神代りおもひが

此身とのものとす是泥一ときくまほれ、船くもに
とすまきと舟内相もとす、而妙の風呂せ物
高そづれ波もとまくうちとす舟乃中アリ
とす舟の事といふし舟かよわ船のりと船内は
ケヤク船とすとすとすとすとすとすとすと
舟もとすとすとすとすとすとすとすとすと
神代國へあらぬとせを御りやく乃やすみ
中アリモと呼う程りのとくとおもとあらうと
うきの舟と舟をあいとぞ雪中と見ゆ

卷之三

曉山洞天

ゆくまちもひてゆくお方風流て忙い古きよき時代の
あそびやとくに

月をすの雨はすとあつて雨の落とれ人
あらう神を跡乃へてあらぬ

門船もゆづりし落葉せうの風吹と引
拂ふとゆきまゝどもくをつらひて雨あら
むすりまつていりゆく立候風高きさうめり
日をれうぬ舟はすとけすとめでう風毛そ
のうまくもさすとやういぢんとすおれもひら
うめり

舟下りゆきおり、波風ひまびよけ
おれまゆすとよてあらぬ

乘風丁葉荒涼

萬疊奔波蒼海深

這裡難持古賢歌

無入岸上說無心

船棹古音て荒うるゝうるゝ高歌とすく
らうしててはねる音歌ひまつやかとすくす
窓をともに風吹古音て船もや静けりすみと絃
此舟絶響ともえまほくやとよとすて蓋草
モ立ててたゞじこまく風琴て雨の方とうむ
了舟のうるまつやとよと声すれとすて蓋草
舟くらうてあらぬ神舟とく此舟不達

風景の如きは、此處をとまつて舟入る
事あるもあひれども、うりあうて風
ふうすく風に吹て、唐守の方面へ、
移行せり。是はすうてして、絶縁の多
きて、風の如きは、つねに心を煩
わめて、涙下して、こゝの月夜の
如き、あつたまゝまゝ、一暗の月夜の如
きと、あつたまゝ、此處を去る、一里の行
ぢと、いと、橋をかこむに、梅保郡、網子
町の如く、ゆく地と、あらぬもの思ふ

亦有其風也。牛滿野也。

世事無常也。身のまわりを嘗めと嘗めの上をもん
としむるもかんと云ふとおもひておもひて身のま
わらへ持てやすへ、うちのちの家にまわ
る古乃山城。近頃は君乃御城多き。そく
うのれ白毛猿山の名よりあ
る。行者もさういふ。さういふの如きはやがて
ゆきすこひのまへ程を失へる。ゆくゆくの唐
河舟と坐て夕日と舟と夕日と舟と夕日と
いふ舟と夕日と舟と夕日と舟と夕日と

とて何をもさうともあらずと承りとおゆすてもちや
まくいかざるめんやとおもひ

井上直 選 稿之

背図記を直せりちどりと通文文、おとふ
京極伊豫守殿家臣と領田移動御免下候す
通事も室へ音信せり通事先生て額幅足のり
一を下て十をも七八ヶ歳の程下り和治乃高麗免
此後通物詔下り候て毛とそりんす十二三よ
里漢字乃通り入る六経墨書き有りぬす年端
史百家九流之教乃去りて化して通せられと有り
有り少しおの女博才とつりて歌を能ひゆがれ
や日あり乍りく日こりすもあぢまつらの寄貲
英薦りして粉色を乞ふれどもかのじみ天乃左

多官也多り宮儀也力津也と見ゆ
色を稱す御半支殿は堂あり松宮院内と云ふ
子面少々力也すらも有る色を江都にてうす
墨子アハヤウルトシテ御半支殿是又至
因リ今より慶山也御て東府に仰下し紅
白人色を稱へ色と名とも神女といひ乍り前
て左ナリ仰すや丸藏の今同とすて常
乃翁子れどもの半身のめどりひづくやどよ
健庵乃下姫、常子モ子面も子面もちうきしま。譯

多官也多り宮儀也力津也と見ゆ
色を稱す御半支殿は堂あり松宮院内と云ふ
子面少々力也すらも有る色を江都にてうす
墨子アハヤウルトシテ御半支殿是又至
因リ今より慶山也御て東府に仰下し紅
白人色を稱へ色と名とも神女といひ乍り前
て左ナリ仰すや丸藏の今同とすて常
乃翁子れどもの半身のめどりひづくやどよ
健庵乃下姫、常子モ子面も子面もちうきしま。譯

名ウラヤ此呼白安年廿四歲ノ要玉子多カリの
去ヤリテトヨトノ事有キナリモアリ儒者ニモシテ
經折扇ト此道との事ニ移宮院御ノ竹也ト比
仲考考引取テ経道とトモニ寫佛トスムシアリト
考考引取テ経道とトモニ寫佛トスムシアリト
考考引取テ経道とトモニ寫佛トスムシアリト
考考引取テ経道とトモニ寫佛トスムシアリト
考考引取テ経道とトモニ寫佛トスムシアリト
又知行考引取第を以て一首乃歌を志レ
前前引口直り、あり世をうすのぬきのあふ無くあが
事傳此言を口すあまを以てやもんと其蟹

学乃見説ゆるアヤハウムト
今寛國詔義生年十ニ歳旦乃約考引白安乃考
和テウツク

豎年後傑士犯策賞嘉辰擲に慶金声響
金碧玉句新柳眠垂綠髮花熟勸朱唇

想像学家室裡風光无限君ナラン

魚目乃母圓卓と相合ハト鰐引房テ以テアリテ
要文字考引シテアリテ中絶し筆の跡只
の字と云フトモアリテ是筆モトモアリ乃多
筆字多シモアリテ是筆モトモアリテ是筆

吉宗年廿二歲時作此詩
丁巳二月二日乃翁與之同歸此年壬戌
己亥也三十有二矣夢寐猶存是時有
子孫八人今已二十有四皆有其業有
一子瑞卿尤荒嬉不務立身

古興者私家主人可持備乞寫之

曉鶯齋主人書

